

生み育てる人の心と体に寄り添うための子育て支援者「15のまなび+1」

第15、16回 「子どものことばはどのようにして育つのか」

浜田 寿美男 （奈良女子大学名誉教授）

浜田先生は、子どもの発達心理学を大学から50年ほどされ、1974年のかぶと山事件（兵庫県西宮にある、かぶと山学園という知的障害児の入所施設があり、二人の子どもが連続して行方不明になり、その後、学園内の浄化槽内から見付かる）の弁護団からの依頼で関わられたそうです。この事件に付き合う中で、小さい子どもから大人に至るまで、言葉を使い始めた人間がどういう世界を作っているのかを見た時、単に個々の子どもの育ちの中で言葉はどう伸びていくのかだけを見ていては済まないと感じられたそうです。現在も刑事裁判の仕事が続けておられ、その体験から目を見開かされた部分も多いとのこと。

（以下は録音原稿をもとに、発達、ことばの獲得についてのお話しを中心にまとめたものです。）

子どもを守るだけの現代の子育て観

ソーシャルスキルは結構複雑なことなので、できなくても当たり前で、少しくラスの中ではみ出すような子どもがいると、相談して発達障害だと名前を付けて、クラスを特別支援学級に行ってもらってこまめに見て貰えば良いのではないと言われる。親御さんもこまめに見て貰うというところにどうしても目が行ってしまうので、その方が良いたらうとなってしまう。ですがソーシャルスキル、対人的な関係をうまく取れない、空気が読めない、相手の意図が読み切れなくてとんでもないことをしてしまう子たちは支援学級に行くことになります。そうすると人と付き合う能力に問題がなく友達ともうまくやっていた普通の学級の子どもたちは、支援学級の子どもたちと付き合う機会がなくなります。ということはソーシャルスキルが苦手な子どもたちと付き合うソーシャルスキルを失うのです。ハンデを持っている人と付き合う経験があって、その中で共同の生活を作っていくことを覚えて貰わなければいけないのに、周りにそんな人がいない子ども時代を送るのはどうなのかと思います。

私も障害を持っている人たちと付き合う経験があり、重度の寝たきりの子どもたちの養育の現場に出入りしていて、人が育つとはどういうことなのかを見て体験したりしていました。自閉症の概念は、1943年にレオ・カナリーという人が言い出したのが最初だと言われています。その施設には、自閉症という診断に関西で第一号についた子どもがいました。小学校は普通学級に入ったものの、いろいろ問題をおこすので、母親はしょっちゅう学校に呼ばれていたそうです。息子が隣にいた同級生の女の子に噛みついたさい、さすがにお母さんも見て息子を叱ると、噛まれた女の子が「おばちゃん怒らんといて、この子が噛むのは、この子の言葉みたいなものだから」と言ってお母さんは非常にビックリした話がありました。その子がどういうところで生きていて、どんなしんどさを持っているのかを感覚的に分かっている子は少なくありません。

一つの物差しで見れば、自然は必ずばらつきが出るようにできています。

身長という物差しで見れば、栄養をちゃんと摂って育てても、すごく背の低い子もいれば高い子もいる、そうになっているとしか言いようがありません。

少し成績が悪い子達には頑張れと言う、でも学力も身長の話と同じで、算数の能力の物差しを作れば、少し教えるだけで、ほとんど分かる子もいれば、なかなか分からない子もいる、それは当たり前なことです。この当たり前をどう受け止めるのか。とにかく勉強を頑張れ、頑張れば頑張るだけ伸びるのだからと親は言うてしまうかもしれませんが、それは相当ウソだと私は思っています。

頑張ればできる、そんな簡単なものではありません。そんなことを誰もが知っているはずなのに子どもにはそれを要求してしまう。なかなか分からない子どもたちも、ちゃんとこの社会の中で楽しく豊かに生きていけるようにしようという発想を考えるべきであり、その子をなんとか伸ばさなければ生きていけないという話しほど怖いものはないと思います。

そのように考えたとき、今の時代は力を伸ばすことに一生懸命になり、それを競い合う高い能力を示せる人ほどより楽に生きていけると思っている。今の子育て観、私たちが普段子育てはこういうことだと思っていることを素朴な言葉にするとそういうことになると思うのです。つまり、子どもは弱い存在なので大人が守らなければならない。素朴に言うと、守っている中で子どもは将来必要になる力を一つ一つ身に付けていく、そうやって大きくなっていくという風に思われていると思います。これは間違いではありません。今の子どもたちはひょっとすると守られっぱなしなのではないかと思えます。

私は1947年生まれで70歳になりますが、学生だった50年、60年代にかけての子どもと、今、目の前にする子どもたちは生きる姿が全く違うと思えます。

当時も私たちは親から守られていましたが、守られっぱなしではありませんでした。5人兄弟で私は末っ子、一番上とは15歳も離れています。子ども時代の話しをすると自分達の子ども時代は親に本当にこき使われた話しをします。みんなが生活者の一人として家族労働の一員を担っていて、それで大人になっていく形をとっていました。子ども同士で遊びながら赤ちゃんがいるのもごく自然でした。大人から大きく守られながらも、子ども自身が自分より弱いもの、より幼いものを守る立場にもいました。

子育ては今、大人の文化になっていますが、かつて子育ては子どもの文化の中にちゃんと根を下ろしていました。例えば人類史を1万年とするならば、ここ50年は子どもたちは守られっぱなしになりました。それより以前9950年は子どもなりに自分より弱いものを守りつつ、大きく守られるサイクルを経て、大人になり子どもができた時、今度は親として子どもを守るステージに入る。そういう形で人類は繋いできたはずですが、今の子どもたちは守られっぱなしになっている。

発達とは、身につけた力を使って活かせる世界が広がること

最近、小中学校で自尊感情が育たないと盛んに問題視されています。自分自身に自信が持てない、自分が生きていく意味を充分確認できなくてしんどいところで生きている子どもが増えています。そこで学校が言うのは、褒めることをしようです。親の子育てでも褒めて育てたりしますが、確かに褒めることは良いことで大事なことです。でも褒めることで自尊感情が果たして伸びるのか少し疑問に思えます。

自分が働くことで周りが喜んでくれる、それが自分自身の自信に繋がりました。それが基本だと思います。そのような姿が今の子どもたちには本当に少なくなっている。自分の力を使って何かをやり、周りが喜んでくれる機会が奪われています。かつて長男が下の姉弟の面倒を見るのもそうです。遊びたいのに背中に赤ちゃんをおんぶしているので中途半端な遊びしかできなかったかもしれない。でも本人にとっては姉弟を育てている喜びに繋がっている。そういう感覚を今の子どもたちは失っていて、守られっぱなしで良いのかと思います。子どもは子どもの力を使うべきではないか、その力を使って生活者としてお互いの共同生活を作るというところに入っていかなければいけないと思います。

将来必要な力を身に付けるのが子どもの仕事だという風に言われて、簡単に言うと勉強しなさいということです。ただ間違えるのは力を身に付けるということだけに焦点を当ててしまうと、身に付けた力をどうするのが欠落してしまいがちです。身に付けた力は当然使って生きていかなければい

けません。これをセットで見なければいけないのに、力を身に付けるところばかりに目が行ってしまっています。

能力を身に付けることで、それまで味わえなかった世界を味わえるようになる、これが発達です。言葉の力もそうで、言葉の力が身に付く以前は周りで喋っている人たちの声は聞こえています、ちゃんとした意味が伝わってこない状態です。私たちが外国へ行き、周りは外国語で喋っている、でも意味が全く分からないという状態と同じで、赤ちゃんはそんな状態から始まります。

その中で、相手の感情は声のやり取りのニュアンスで分かりますが、言葉の中身は分からない。ところがやがて声の意味を持つようになります。それが言葉の獲得です。

自分の思いを言葉に託し相手に伝えたり、あるいは相手の言葉の意味を汲み取り、自分でそれを活かしていったりする。それまで声の世界でしかなかったものが意味の世界になり、思いを交換できるようになる、これはとても大きなことです。言葉がただ身に付くだけの問題ではなく、身に付いた力を使って活かせる世界が圧倒的に広がるということ、そこに意味があります。

学校は、今の子どもたちにとって非常に大きな世界になっています。そこで力を身に付けることを要求されます。身に付けた力を使ってそれまで味わえなかった新たな世界を味わえるようになったとすれば、それは大変嬉しい事です。ところが、身に付けた力は日々の子どもの暮らしの中で使われることで意味があるべきところ、どれくらい身に付いたのか試験で発揮するということに追いやられてしまっていて、力を持っているかどうか試される。だから力を伸ばさなければいけない。試される力と使う力は全く違います。試されて点数になる、そこで学力を上げることに親子で必死になっている、これは相当まずいことだと思います。ただ簡単に変わらない状況にあります。身に付いた力を日々の中で使ってそれが豊かな世界に繋がる感覚が、じょじょに失われています。学校の勉強はたしかに大事です。でもそれが身に付いたかどうか試される形で身に付けたとき、本当に身に付けた力で生きる世界をいわば放棄してしまうようになっているのではないかと思います。点数が良いか悪いかで周りが一喜一憂するような状況ができてしまっていることが問題で、新たなことを身に付けそれまで味わえなかった世界を味わえる、そこに繋がらないのであれば学びは意味がないと私は思います。

身に付けた力を使う機会がなく、身に付けることだけが求められる、それで学校教育が成功するかと私は思います。発達の原則は身に付けたら使ってちゃんと根を下ろすことです。そこを忘れてしまっている状況が続いています。

今、小中学校、高校教育の中で、学力を身に付けることに親も子も必死になっています。学校で身に付けたことを忘れても社会で生きていける、そうすれば忘れても構わない。どうして覚えている必要があるのかという、でもそれは錯覚です。学力で小中高大という学校制度のはしごを順調に渡れるかどうかが決まるからで、これが錯覚の上に成り立っている現実なのです。

力を伸ばすというところに目が行く学校教育の中で、私たちは何を身に付けたかという、力は身に付けるもので使うものではないと習いました。学校教育の中で発達を考えてしまうと、力を身につけることだけになってしまっているが、そうではないということを知っていかなければいけません。そういう意味で、私はごく自然な意味での発達に関しては、あえて原則こういうものだということわざわざ言っていることがあります。

生活の中で子どもが力を使える場面を作ることの大事さ

人は体のあるところで生きていて、それはここ、今です。

当たり前ですが、今日生きることについては、今日自分の体に備わっているこの力で生きるしかありません。できなければ、できないことを認め、自分の手持ちの力で何とかやりくりしていくしか

ないのです。そのようにして自分の手持ちの力を最大限使っていく、その結果として明日新しい力が出てくる、かもしれない…そんなものなのです。その力を最大限使うことで伸びていく子どもは伸びていくし、伸びないこともある。ハンデがあるとどうしても伸びないこともあります。それをどうやって引き受けていくのか考えていかななくてはいけないと思います。自分の今の体に備わっている力を最大限使って、今を豊かに生きていく結果が、発達です。発達を目標にするようになったとき、どこかで問題のすれ違いが起こります。発達は結果だということにも関わらず、まるで発達の為に生きているかのように、子どもたちに力を付けることを求めてしまう、それは違うのではないかと思います。

もう一つ言っておくと、力を使って生きるという言い方をすると、力を使って自分の為になることをするように思いますが、それも違います。自分の力を使って何かをし、周りの人が喜んでくれることも大事な力の使い方です。人間にとって大事なことは、自分の力を使って何かをして周りが喜んでくれることで嬉しい気持ちになるということです。子育ても相当厳しい仕事ですが、子どもが喜んでくれるのが嬉しくてやっている、これはごく普通の事です。

例えば保育所で2、3歳の子どもを0歳児のところへ連れて行くと、0歳児の面倒を見ようと頑張ります。これは自尊心の基本です。力を使うことで結果として新しい力が身に付く、そういう構図の中にもかかわらず、今、子どもたちは力を使うのではなく力を身に付けることばかり求められています。

家の中で子どもたちの出番はありますか？

日々の暮らしの中で、子どもが力を使って相手が喜んでくれる機会をどれだけ持てるのか？

そういう意味で一番分かりやすいのは料理で、自分一人だけの為に作ると、あまりたいしたものを作らないのではないのでしょうか。誰かが食べてくれるから力が入ったりします。これは子どもも同じです。料理は一生ものなので、小さい時から子どもたちが料理するという感覚を身に付けた方が良いでしょう。でも料理をするスキルが子どもたちにはまだないので、できることからしようとなります。それで配膳の準備や洗い物をさせたりする、でもそれは料理の中でも一番面白くない部分です。一番面白い、本番の部分をさせる方が良いでしょう。包丁が持てなくても今はスーパーで買ってくるだけでも済むものもあります。今の子ども力のままで晩ご飯の用意ができる状況は整っています。子どもたちに家族分の晩ご飯を全部任せる、作り方が分からなければ聞きに来れば教えてあげるようにする、スーパーで買って来た物を並べても構わないと言うと、最初はそうするかもしれません。ですがスーパーへ買いに行きどれを買おう、お父さんはお酒を飲むのでつまみ要るかな？お母さんはデザートを欲しがるかもしれないなど考えてくれるだけでも嬉しいと思います。そのように並べるだけでも晩ご飯はできます。

子どものその時の力のままでできることをお願いしてやってもらう、そこからスタートしていきます。本人の力でできることをしてもらい、そうすることで子どもたちが料理を楽しんでできるようになります。つまり手持ちの力を使って生きることが出来る。そのような形で生活の中で子どもが自分の力を使う場面をしっかり持っていることが生きていく上での基本だと思います。

発達論でいうと、難しい言葉で正統的周辺参加論と言う学習論があります。

学校教育批判の一つから出てきたもので、職人集団に丁稚奉公で入った人たちが、いかにして職人になっていくのかということの一つの学習として捉えたものです。

例えば大工で入った人たちも最初は大工スキルの一つも知りません。掃除や道具の片付けくらいしかできない、そういうところから入ります。やがて先輩達がやっている姿を見ながらカンナのかけ方、金づちの打ち方を盗み見て学んでいきます。正統的とは本物と言うことで、本物の職人集団、

生活集団の中に周辺から入っていく、手持ちの力の周辺から入っていくという意味で、その中で本物を身に付けていく発想です。家庭生活もまさにそうで、生活が本物であればそこに生まれてきた赤ちゃん、子どもは周辺で参加させます。子どもたちは参加したがるはずで。

そういう中で本物を身に付けていくことが正統的周辺参加論です。難しい言い方ですがごく普通に私たちは家庭生活の中でやっていて当然のことだと思います。ところが今は、子どもたちは仕事をしなくても良い、学校の勉強だけをしなさいとなっているので、生活そのものが本物ではなくなってきています。その点では子育ては、子どもは家族という生活の中で参加することだと位置付け直す必要があると思います。

発達とは0からのスタート、引き算で考えない

言葉について、基本的な流れ部分の話しをします。3、4歳でまだ言葉が喋れない子どもに出会うと、どうしてこの子は喋れないのかと思ひやすいですが、それはでき上がっている人間を前提に置くからで、逆に喋れている私たちの方が不思議だとまず押さえておいた方が良いと思います。

発達とはそもそも何なのかという議論の中で大事なものは、ほとんど0から始まっているということ。誰もが受精卵、単細胞から始まり、この単細胞だったものが十月十日で人間の姿で生まれてくること自身が不思議で、人智を越えていると分かります。

還元と名付けていて、元に還ること、哲学用語で難しいですが、でき上がってしまった人間を前提に置き発達を考えないということです。

人は受精卵から始まり、そこから形成されてできてきたものだと見ると違ってきます。完成した人間を前提に置くと、ハンデの問題を全て引き算で考えてしまう。人間だったらこれだけできてしかるべきところを、視覚障害であれば目が見える機能が欠けている、聴覚障害であれば聞こえる能力が欠けているというふうに引き算で全部見てしまう。あるいは子どもの育ちの「まだ首が据わっていない」「まだ言葉が出ない」という「まだ」という言い方は、引き算で見えている。発達を考える上での原則として引き算はないということを考えています。

赤ちゃんは1、2ヶ月まで見ていないがやがて見ている目になり、遠近あらゆるところに視線を移して物を見るようになる。その当時、その赤ちゃんは物を見ていないだけではなく耳もほとんど聞いていない。そこで1、2ヶ月の赤ちゃんは世界にまだ窓が開いていないという言い方をしています。我々の生命とは、外に窓が開いていない状態から外のものを捉えてやり取りするところからスタートし、やがて世界に対する窓を閉じてあの世に還っていくのだと思います。

その間の数十年を私たちは生きています。なので、私たちが目を開けて外のものを見るのは当たり前だと言っているところを一旦疑ってみて、初めて重度の子どもたちの世界が分かってくるのではないかと考えたりしています。

1歳の赤ちゃんは、外から自分がどう見えているのかという意識はほとんど無いということです。すると、私たちのように人からどう見られているのかを常にしっかり意識してしまっている大人と、そうではない子どもとでは、私がこの世界を生きているという構図が同じかどうかというと相当あやしいと思います。それでもこの世の中に生まれてきているので新生児でも存在感はあります。私がこの世界を生きているという欠片みたいなものは持っているかもしれませんが。では胎児は今、お母さんのお腹の中にいるという形で、私がこの世界に生きているという構図を味わっているのかというと相当あやふやになります。さらに胎児の前の受精卵では、私が卵だと思っているとは思えません。となると、私がこの世界を生きているという構図を遡ってみると、ほとんど0に戻ってしまいます。そこからスタートしたということ。

言葉を喋ることもそうで、実は非常に複雑なプロセスを経て成り立っています。そのプロセスを当

たり前のように「2歳になればこれくらい喋れるはずだ」と言わない方が良いのではないかと思います。

体がもつ個別性と共同性

では言葉はどのようにして成り立つのか、それは体が基本だと思っています。そこからスタートして言葉が成り立つ流れ、最初、初語が出てくるプロセスまでをまず追いかけていきます。

体はどういうものか考える上で私は個別性と共同性だと思っています、個別性とは、体は一人一人別々だということ、生まれるのも死ぬのも一人でこれはもうどうしようもなく皆そうになっています。論理的自己中心性と言って、身体をそれぞれ持っているというのはそこから生きるしかないということ。自己中心性の反対語は心理用語の世界では脱中心化と言って、中心から抜ける、子どもは最初自己中心的にしか世の中を見ることができませんが、やがてその中心を抜け出し客観的に、第三者の目線で物事を見ることができるようになる、その事を脱中心化と言います。自分の中心を抜けて世の中を見ることができるようになる、これは発達の上でとても大事なことです。

人は体でもって人と付き合わざるを得ないところを生きている、しかも体は表現をしています。自分の体が辛いと思っているのか、楽しいと思っているのかが体に表れてしまって周りがそれを見てしまう、そういう共同性を体は最初から帯びています。

共同性の具体例として同型性と総合性で示しています。

同型性は、相手と同じ形をとるようにできてしまっていることで、新生児の観察の中で、赤ちゃん顔と顔を合わせてこちらが口をゆっくり開け閉めすると、赤ちゃんも口を開けたり閉じたりする、舌を出すと赤ちゃんも舌を出したり真似をすることが自ずと起こることです。

もう一つの総合性は、相手と能動受動のやり取りをしてしまうことで、目が合うという現象が一番分かりやすいと思います。目が合うとは相手の眼差しを受け止めている、相手が自分を見ていることを見ている、視線を感じている、でもなぜ感じるのか説明はできません

生まれてすぐの赤ちゃんは自分から能動性という相手に向かって発信することは難しいので、ほとんど受動の嵐の中にいます。周りから〇〇されることは、実はとても大事な事で、相手の主体性を受け止めているということ。受動の嵐のような中にいて、やがて自分自身が相手に向かって主体的に能動的な働きかけを返すようになるという構図になるので、赤ちゃんの時代はとても大事な時期なのです。日常的に感じやすいのは統合性で、能動受動のやり取りです。生後6ヶ月くらいの間にどんどん感じるようになります。そこを受け止めやり取りが成立していくことはすごく大きなことです。

言葉の獲得には体験を共有する三項関係が必要

一つの物を一緒に見ることを考えると、非常に複雑なことで同時に見ることとは違います。

一緒に見ることは一つの物をお母さんと子どもが見ている。

同時に見ることは、相手も見ていると確認して見えています。

一つのことを一緒に見ることを体験することは、相手と自分とがその体験を共有し合っていることで、これを私たちは三項関係と名付けています。大人の世界ではあらゆるものに意味を与えています。でも子どもはものに意味があることも知りません。周りの大人たちがそのものに対してどのような振る舞い方をしているのか見て、ようやくそれが何か分かってきます。身の回りの意味を捉えるようになってくるプロセスがこの三項関係を通して成り立っています。

大人が生きている意味世界を、大人のそのものに対する振る舞い方を通して自分側に浸透させていく、これをしき写すと言います。

言葉を身に付けるといいますが、言葉が身に付く以前に、そのものが何か分かっていることが基本になっています。そこがなければ言葉に到達しないという意味で三項関係的に周囲の人と体験を共にすることがあって初めて言葉の土壌ができるということ。

能動受動のやり取りは、自閉症の子どもたちはすごく苦手です。目が合いづらい、抱っこもしづらいなど三項関係の形成が難しい。同型性の方がむしろハンデが少なく身に付きやすいと私は思います。

0歳の段階で目が合いづらかったり、声を掛けても全くこちらに無関心であったり、抱っこをしても反り返ってなかなか抱きついてくれなかったりする子どもに出会うことがあると思いますが、そういう子どもたちの難しさは三項関係の形成の難しさに繋がります。周りの人たちの意味世界が自分側にしき写していけない、これは相当深刻です。

つまり私たちは全てのものに意味がある意味世界を生きているから安心して生きていける、そこに難しさを持つことが有り得るということです。

その意味の世界を、子どもたちは育ちの過程の中でしき写して、自分もその同じ意味の世界の中で生きていこうとする。ところがその三項関係が難しい子どもがいると、意味の陸地の方へ立ち上がってこない領域が広がってくるかもしれない。それで無意味の世界に沈んだまま周りの大人たちの意味世界に入り込んでいけない領域が相当出てきます。平面図で書くと無意味の海の中に意味の島が浮かんでいるような状態になります。

意味とは、そのものに対する振る舞い方だと考えたとき、自閉症の子どもたちもこのものに対してはこうすると分かっているものも結構あります。ものの物理的、生理的意味は分かりますが、社会的文化的意味は浸透していかない、しき写しされていかない。例えば、紐状のものがあれば、それをクルクル回して1日中過ごしているような子たちは、それが自分にとっての振る舞い方が分かっているもの、だから安心してそのように振る舞える。しかしそんな事ばかりやっているから社会の経験が広がらないと大人が取り上げてしまうと、せっかく遊んで落ち着いていたのに無意味の海に投げられた状態になりパニックになる、このようなことが起こっているのではないかと思います。

音の世界についても、例えば私たちも駅のホームで友達と喋っている場合、周りでものすごい音がしていても、その中で友達の声だけを拾って聞きます。自分の意識に取り出してくる部分と、背景に沈める部分を分節して体験できるようになっています。聴覚過敏は、お互いの共同世界を取り出すことが難しいが故に、耐えられないことになっている可能性もあると思います。

そう考えたとき、私たちが意味世界を生きるようになるということが、いかに大きいことなのかをまず知って欲しいと思います。

その上で、言葉以前の「ワンワン」という言葉が、犬だという意味合いの言葉になる為に何が必要なのか。言葉以前の子どもは言葉をまだもたない、言葉をもっている大人は子どもがまだ言葉を分かっていないと分かっているながら、盛んに言葉を掛けて喋ります。そういう構図の中で、子ども側からすると言葉以前のやり取りの手段を用いて、大人とやり取りをしているわけで、そこがスタートなのです。

まずワンワンが自分に掛けられた言葉として受け止められること、たくさん刺激があるところから一緒に一つのものを取り出してくることがあって初めて、ワンワンが言葉の要素になり得ます。

ワンワンという音声がお母さんから子どもに掛けられ、子どもがその掛けられた声をお母さんが自分に掛けてくれたと受け止める、自分と誰かが音声の体験を一緒に共有していて三項関係が成り立っています。相手と自分とが声のやり取りをしている、言葉になってくる為には言葉以前の声をやり取りする必要があります。

犬の体験を子どもと共有しながら、ワンワンという声が発せられる、それが繰り返されワンワンが犬になります。声のやり取りの共有の体験と、世界の中で出会ったものの体験の共有とが重なったところでワンワンが犬になります。そういう構図の中にいるということ。

ハンデを背負うケースもちろんありますが、言葉を獲得する装置が人体の周りに予め用意されていると思わざるを得ません。それと三項関係の二つが重なり合って、相手と自分とが意味するものである音声と、意味されるものである体験とを重ね合わせる、この四項関係の重なり合わせの中で言葉は登場すると見るべきだと思います。

感想

力を身に着けることだけを考え、その使い方、発揮のしかたまで考えない学校教育や、発達を引き算でみてしまう考え方など、なんとなく違和感を感じていたことを、それはこういうことなんだと言語化して頂いたことで、めざす方向性がはっきりしたように思いました。